使わないそうですが、これは中国の一種の独自的な思想によるものと思います。しかし、いずれアジア的なグローバリズムの中で、あるいは世界的なグローバリズムの中で、中国もいずれ近代文学を創設し、近代という時代区分も設け、近代としてこれからやっていくのではないかと、勝手ながら心配もしております。時間になりましてのでこれで終わりにします。

並木真人

並木：フェリス女学院大学という、昨日李省展先生のご報告の中でご紹介いただきました、日本で最初の女子学校から参りました、並木と申します。

私は、この三日間、多くの先生方の迫力あるご報告をうかがって圧倒されている状況でありまして、未だ充分に整理がつきかねております。しかしながら、この三日間の討議の中で、私なりに得られた成果を二点ばかりご紹介することで、ディスカッサントとしての責務を果たしたいと考えます。

まず一つ目の成果と私が考えるのは、鄭在貞先生、李鍾旼先生、それから尹健次先生を中心に、多くの先生方がお話しくださった「近代性」の問題です。ポスト・コロニアルとか、ポスト・モダン、あるいは韓国の言い方では、それぞれ脱植民地とか、脱近代というようになるのかも知れませんが、これらに関して批判する立場、あるいはそれを評価する立場、様々な形で学問的な議論が始められたということが、やはり一番重要な成果の一つであろうと思います。コロニアリズム、モダニティー、ナショナリズム、こういった概念は、植民地期の朝鮮のことを研究する場合に頻繁に口にする言葉ではありますけれども、これまで本格的に正面から検討してきたと言い切れるかどうか、非常に危うい状況にあると言わざるを得ません。このような状況に関して、例えば、ハーヴァード大学のカーター・エッカート（Carter J. Eck-

ert）教授は、「マニ教的二元論」というような表現で批判しています。

エッカート教授の表現を借りれば、ナショナリズムとかモダニティーというのは、「マニ教的二元論」で言う、善の側、善の神に該当することになり、その崇高性、その素晴らしさということに関しては、様々な研究者が口を揃えて褒めそやすけれども、それがどのように、そして何ゆえに素晴らしいのか、あるいは他の概念と比較してどうなのか、といったような相対的な評価は充分にしてこなかったと言えます。一方、コロニアリズムというのは、それに対して、悪の側、悪の神に該当するというか、こうしたものには触れるのも汚らわしいということで、やはり充分には検討してこなかったと言えます。いずれも一種の「不可侵」という状況になっていたと思うわけです。こうした考え方、二元論の捉え方自体が、いわば日本の植民地支配の「負の遺産」であると評することも可能かと思うわけですが、今回のシンポジウムにおいては、このような桎梏を乗り越えて本格的な論議ができるようになってきたということが、一番重要だろうと思います。ポストと言うと、もう既に近代とか植民地とかということに関しては、議論は終わってしまったのだ、決着がついてしまったのだというようなイメージがあるかも知れませんが、むしろ逆に、モダニティーとは何かとか、コロニアリズムとは何かとか、あるいはナショナリズムとは何かとかということが、ようやく本格的な議論の俎上に上るようになってきたというのが、現在の状況ではないかと考えるわけです。

その中でも、特に「近代」というものに関して、この三日間の討議のなかで相異なる様々な立場が表明されたように思います。やや乱暴に整理しますと、「近代」に対するイメージが、およそ三つの立場から検討された、と言うことができようかと思います。すなわち、一つ目がいわゆる「植民地近代化論」、二つ目に「植民地収奪論」、三つ目は李鍾旼先生がご紹介されたもので、どう表現したら適切かわかりませんけれども、とりあえず規律権力論というように呼んでおきます。このような三つの立場が、それぞれ独自の形で「近代」に対するイメージというものを打ち出しているのです。これについて若干の説明を

加えますと、全般的に「近代」を肯定的に評価しようとしているのが、「植民地近代化論」と「植民地収奪論」です。それに対して、「近代」の否定的な側面というものも合わせて見ていこうというのが、「規律権力論」であると言えます。同じく肯定的に「近代」を評価する「植民地近代化論」と「植民地収奪論」との決定的な違いというのは、近代化ということと植民地主義というものとの関係をどう見るかという点にあります。近代化というものと植民地主義というものが全く相容れない、むしろ植民地主義は近代化を全面的に否定するものである、それを押し潰そうとするものであると捉えるのが、「植民地収奪論」であり、一方、親和的とは言わないまでも、植民地主義が近代化をある程度まで促進した側面がある、近代化の条件を用意したと捉えるのが、「植民地近代化論」であるというように、まとめることができると思うのです。「規律権力論」における「近代」に関するイメージを含めて、どれが「近代」に対する正しいイメージであるか、ここで速断することはできませんが、このような形で、「近代」に対するイメージというものが膨らんできた、豊富なものになってきたということが、今回のシンポジウムの成果として挙げられるのではないかと思います。今後も、こうした視角の研究をさらに発展させて、「近代」というものについて徹底的に考えてみることが、我々に課された大きな課題であろうと考えるわけです。少々舌足らずではありますが、一番目の成果については、このような感想を述べておきます。

それから、二番目の成果としましては、中心となるのは布袋敏博先生のご報告でしたけれども、他の方々のご発表でも見え隠れしていた問題として、日本統治下の朝鮮における日本と朝鮮の関係を、「協力」という観点から捉えるということが挙げられます。一般には「親日派」と呼ばれる問題、私自身は以前よりこれを対日協力者（collaborator）とか対日協力（collaboration）と呼ぶべきだと提言しています。こうしたコラボレーターとかコラボレーションとかという問題、従来であれば、歴史叙述の中で必ずしも明言されてこなかった部分、

できれば隠しておくべきだとされてきた問題が、日本人と韓国人、さらに在日の人々が一堂に会したこうした公の場で、しかも学問的な検討の対象とされるようになってきたというのは、もう一つの大きな成果であると考えるわけです。このことに関しては、布袋先生の昨日の詳細なご報告にもありましたように、文学が歴史をリードする、文学研究のほうが歴史研究よりさらに深いところまで追求しており、多くのタブーを克服して得られた文学研究の成果を歴史学のほうが後追いしているという現状にあると見られます。これを何とかして歴史学の中で正当に位置づけるということが、今後の重要な課題であると考えます。

しかし、その一方で、「親日文学」という形で、文学研究がこの問題を先駆的に扱ってきたということの問題点というものもあるように思います。一つには、韓国などで、「親日行為」という言葉より「親日派」という言葉のほうが、圧倒的に人口に膾炙しているように、こうした評価が従来人物本位でなされてきた、ということの欠点をきちんと認識すべきだと思うのです。このような見方は、ややもすると、誰が親日派であり、誰が親日派でないかという、そうした分類、レッテル貼りに堕してしまう危険性があります。極端に言ってしまいますと、こうした研究方法は、片方の極に「親日派」がいて、もう片方の極に「民族英雄」がおり、その中で著名な人物をどのように位置づけるかというような、センセーショナルかつ粗雑な作業になってしまいます。そのために、昨日の布袋先生のご報告でご紹介があったように、今年の「光復節」を記念して、韓国のある民族団体が「親日文学者」を選定して発表するというようなことが、現在もなお公然と行われているのです。

しかし、このようなことが続いていること自体、やはり大きな問題を抱えていると思うのです。「親日」的な行動というものは、言説も含めて行為のうちに求めるべきものであって、人物に対する烙印というような形をとるのは望ましくないのではないかと考えます。しかも、歴史学の立場から言えば、そのような行為に関しても、一見「抵抗」

と見えるものの中に「協力」があり、あるいは「協力」と見えるものの中に「抵抗」があるという、多重性や複合性、さらには流動性を検討することが重要なのであって、こういったものを見落とすことなくきちんと評価しておかないと、植民地期朝鮮の社会を充分に把握することができないのではないかという懸念を抱いているのです。ですから、この問題は、これまで文学研究がリードしてくれたおかげで様々な事実がわかるようになったわけですけれども、一方で、文学者を中心とする従来の見方が、今後の対日協力研究に対して一種の制約になるのではないかという危惧があります。これを克服することが、我々歴史学を研究する者に課せられたもう一つの課業であると考えるのです。このような問題の所在が明らかになった、このことが今回の討議における二つ目の成果であると考えます。短いですが、以上が私のコメントです。

橋谷　弘

橋谷：東京経済大学の橋谷と申します。日本とアジアの経済関係史を勉強する中で、朝鮮に対する植民地支配の問題を経済史的な側面からみてきました。もう時間を大分過ぎておりますので簡単に二つほど、ご報告をお聞きして、あるいは私、途中から参加しましたのでペーパーで拝見した上でのコメントを申し上げたいと思います。

一つは、今回のシンポジウムのプログラムが送られてきた段階で、それを拝見して、まあ大袈裟に言えば非常に感慨深いものがありました。どういうことかと言いますと、恐らく十年前にこの「日本統治下の朝鮮」というテーマでシンポジウムを行ったであろうならば、当然入ってくるテーマ、これがむしろ全く見られなかったということです。十年前ならば、あるいはそれ以前ならば入っていたはずのテーマというのは、一つは、日本政治史の一環としての植民地支配政策史とか、あるいは日本経済史の一環としての日本企業の進出史などです。もう一つは非常に狭い意味での民族運動史です。こういったものが以前で